

ノーベル賞の国際政治学

—— ノーベル平和賞の歴史的発展と選考過程 ——

吉 武 信 彦

**International Politics of the Nobel Prize :
Historical Development and Selection Process of the Nobel Peace Prize**

Nobuhiko YOSHITAKE

要 旨

ノーベル平和賞は、国際政治学の観点から大変重要な意味をもつ研究対象である。第1に、歴代受賞者は国際政治に大きな役割を果たしたと評価される人物、団体であり、各受賞者の研究から1901年以來の「平和」概念の変遷、発展を知ることができる。第2に、ノルウェー・ノーベル委員会の選考過程に注目することで、ノーベル委員会自体が国際政治に果たしてきた役割とその限界を知ることができる。その際、ノルウェーの外交政策にとっての意味も考慮する必要がある。第3に、日本とノーベル平和賞とのかかわりにも長い歴史が存在するが、これについてはほとんど研究がないのが現状である。その埋もれた歴史に光をあてることにより、国際政治における日本の役割も改めて考えることができる。以上の問題意識に基づいて、筆者は国際政治学の観点からノーベル平和賞を研究してきた。本稿では、ノーベル平和賞の創設の歴史、選考過程、歴代受賞者の特徴について考察した。

キーワード：アルフレッド・ノーベル、ノーベル財団、ノーベル平和賞、ノーベル委員会、ノルウェー国会

Summary

The Nobel Peace Prize is a significant research topic from perspectives of international politics. Firstly, the previous Nobel laureates are individuals or organizations who were evaluated by their large contributions to international politics and we can learn from their studies the

vicissitude and development of “peace” concept since 1901. Secondly, the study focusing on the selection process of the Norwegian Nobel Committee shows the roles and the limitations of the Committee in international politics. The implications for Norwegian foreign policy should be also considered then. Thirdly, there is a long history of the relationship between Japan and the Nobel Peace Prize and few researchers have studied the history so far. We can reconsider the roles of Japan played in international politics by shedding light on the buried history. Taking these issues into account, the author has studied the Nobel Peace Prize from perspectives of international politics. This paper examined the founding history of the Nobel Peace Prize, the selection process and characteristics of previous laureates.

Key words : Alfred Nobel, the Nobel Foundation, the Nobel Peace Prize, the Nobel Committee, the Norwegian Parliament

はじめに——国際政治学からみたノーベル平和賞

毎年10月、世界の注目がノルウェーのオスロに集まる。ノルウェー・ノーベル委員会によりノーベル平和賞が発表されるのである。他の分野のノーベル賞がスウェーデンで行なわれるのに対して、平和賞は選考、決定、授与などすべての作業、行事がノルウェーで行なわれる。この平和賞は、1901年に始まったノーベル賞の中でも最も強く政治的色彩をもち、論争的になってきた。平和賞候補として誰をいつの時点でいかなる理由で選出するかは、極めて恣意的なものである。そこには、ノルウェー国会の選出するノーベル委員会委員5名が考える「平和」についての哲学と国際情勢認識が色濃く反映されている。しかし、同時に110年にも及ぶノーベル平和賞の歴史を考えた際、疑問視される受賞者がいる半面、「平和のチャンピオン (fredsförfaktare)」（ノーベルの言葉）¹⁾として広く認められる受賞者も多く、ノーベル委員会の判断は全体としては肯定的に捉えられてきたといえよう。それゆえにこそ、ノーベル平和賞が110年も存続し、世界から注目を集め続けているのである。

このノーベル平和賞は、国際政治学の観点から大変重要な意味をもつ研究対象と考えられる。第1に、歴代受賞者は国際政治に大きな役割を果たしたと評価される人物、団体であり、各受賞者の役割を改めて研究する価値があろう。なかには受賞時に世界的には無名であった人物、団体の存在や活動が受賞をきっかけに注目されたこともある。そうした歴代受賞者の研究から、1901年以来の「平和」概念の変遷、発展を知ることができる。まさに国際政治の理想と現実が凝縮した形でノーベル平和賞に表現されていると考えることができよう。第2に、ノルウェー・ノーベル委員会の選考過程に注目することで、ノーベル委員会自体が国際政治に果たしてきた役割とその限界を知ることができる。すなわち、ノーベル委員会が受賞者を選出するという行為自

体が国際政治に影響をもたらす面をもっている。ノーベル委員会は受賞者の選出に何らかのメッセージを盛り込んでいると考えることができる。それゆえ、ノーベル平和賞を考える際、受賞者を検討するだけでなく、ノーベル委員会が国際政治の何を問題視し、その問題をいかなる方向に導こうと考えているのかを常に問いかける必要がある。その際、ノルウェーの外交政策にとっての意味も考慮する必要があるだろう。ノーベル委員会はノルウェー政府から独立した存在であるとされる。しかし、現実にはノーベル平和賞がノルウェーの「ソフト・パワー」の一翼を担い、ノルウェーの外交政策に貢献していることは否定できないであろう。第3に、日本とノーベル平和賞とのかかわりにも長い歴史が存在する。しかし、これまで日本では自然科学分野のノーベル賞受賞者、候補について関心が集まり、研究もなされてきたため²⁾、平和賞についてはほとんど研究がないのが現状である³⁾。現在までのところ日本人でノーベル平和賞を受賞したのは1974年の佐藤栄作元首相のみである。しかし、日本人がノーベル平和賞の候補となった事例、推薦人として他の人物、団体を推薦した事例は多い。その埋もれた歴史に光をあてることにより、国際政治における日本の役割も改めて考えることができよう。

以上の問題意識に基づいて、筆者は国際政治学の観点からノーベル平和賞を研究してきた⁴⁾。史料として、日本外務省外交史料館史料、ノーベル財団ノミネーション・データベース⁵⁾、ノルウェー・ノーベル研究所史料を基本的に利用した。最も重要な史料は、ノルウェー・ノーベル研究所の所蔵する史料である。しかし、ノーベル財団規約により、同史料の利用は「歴史研究のため」に限定され、さらに決定から50年間は公開されないという制限もある⁶⁾。そのため、現在利用できるのは1960年までの史料ということになる。

本稿ではかかる研究をさらに進める上で大前提となるノーベル平和賞の創設の歴史、選考過程、歴代受賞者の特徴を簡単に紹介しようとするものである。ノーベルはいかなる意図で平和賞を創設したのであろうか。また、ノーベル平和賞はいかなる仕組みで動いているのであろうか。さらに、歴代受賞者にはいかなる特徴が見出せるのであろうか。

1 ノーベル平和賞創設の歴史

(1) ノーベルの1895年遺言

今日、ノーベル賞は世界中に数ある賞の中でも最も有名な賞の一つといえよう。それがいかに生まれたかは、すでに多くの紹介がある⁷⁾。そのため、本章では平和賞に焦点をあて簡単に賞の創設経緯をみておこう。

ノーベル賞という名前に示されるように、同賞はスウェーデンの実業家、アルフレッド・ベルンハルド・ノーベル (Alfred Bernhard Nobel) の遺言に基づき、その遺産を原資として始まった賞である。1833年10月21日にスウェーデンのストックホルムで生まれたノーベルは、実業家の父の仕事により一家でロシアに移住していた時期もあったが、帰国後、父の工場で化学者として

働いた。そこでノーベルは爆薬のニトログリセリンの改良に成功し、これを「ダイナマイト」と名付け、その後もより安全で扱いやすい爆薬の開発を続けた。これらの爆薬は土木工事などで平和的に利用されるだけでなく、軍事的にも利用されることになり、世界中から注文が殺到した。それに伴い、工場はスウェーデンのみならず、他のヨーロッパ諸国、アメリカにも広がった。こうして数多くの特許を取得し、国際的な大企業のトップとなったノーベルは莫大な富を手にしたのである。

実業家として大成功を収めたノーベルは、1896年12月10日、イタリア・サンレモの自宅にて63歳で死去した。同地での簡単な葬儀の後、同年12月29日にストックホルムの大聖堂で荘厳な葬儀が行なわれた。その後、ノーベルの希望に従い、ストックホルムの北部墓地にあるノーベル家の墓に葬られた⁸⁾。

生涯、独身で子供もいなかったノーベルは自分の遺産の扱いについて頭を悩ませ、生前に何度も遺言を書いていた⁹⁾。ノーベルは、巨額の相続財産が不幸の種になり、人間を馬鹿にするだけであると考えており、親族にはわずかな部分だけを譲ろうとしていた。最後に書かれ、それ以前のものすべて無効とした遺言は、死去の約1年前の1895年11月27日付けのものである（巻末資料参照）。それまでの遺言と同様、この遺言も法律家により作成されたものではなく、ノーベル自身が自分の思うまま自筆で書いたものである。ノーベルは仕事上の訴訟経験から法律家を信用していなかったといわれている。そのため、形式においても、内容においても極めて異例ともいえる遺言を残したのであった。

同遺言は、まず親族や関係者の名前を挙げ、遺贈額を具体的に明記した後、残る大半の遺産を基金とし、安全な有価証券に投資し、その利子を「その前年に人類に最大の利益をもたらした人たちに、賞の形で毎年分配されるものとする」と規定していた。さらに賞金が授与される5分野も具体的に明記している。

- ・物理学の分野で最も重要な発見または発明をした人物
- ・最も重要な化学上の発見または改良をなした人物
- ・生理学または医学の領域で最も重要な発見をした人物
- ・文学で理想主義的な傾向の最もすぐれた作品を創作した人物
- ・諸国民間の友好、常備軍の廃止または削減、平和会議の開催や推進のために最大もしくは最善の活動をした人物

なお、ノーベルは遺言において受賞者の国籍についても特に言及し、スカンディナヴィア人であるかどうかは関係なく、国籍等を全く考慮しないことを条件として求めていた。

遺言は各賞の選考母体についても言及している。物理学賞、化学賞は「スウェーデン科学アカデミー」、生理学・医学賞は「ストックホルムのカロリンスカ研究所」、文学賞は「ストックホルムのアカデミー」とされ、平和賞は「ノルウェー国会（Norska Stortinget）が選出する5名の委員会」とされていた。

以上の遺言内容に示されるように、その後、ノーベル賞として実現される賞の骨格がすべて詳細に記されていた。その当時、同種の国際的な賞は存在せず、画期的な提案といってよいものであった。

(2) ノーベルの1893年遺言

ノーベルは、最初から1895年遺言に記された形態の賞を思いついたのではなかった。何度も遺言を書くうちに固まってきたと考えられる。それを裏付けるものとして、1893年3月14日付けの遺言が知られている¹⁰⁾。

この遺言では、親族や関係者への遺贈（個々の金額は明記せず、全体で遺産の2割とされた）に触れた後、団体、学校への遺贈を明記している。パリのスウェーデン・クラブ、ウィーンのオーストリア平和協会、ストックホルム高等学校、ストックホルム病院、カロリンスカ研究所が挙げられていた。オーストリア平和協会については平和思想の発達の促進のために用いることが決められていた。カロリンスカ研究所については、贈与分の一部で財団をつくり、生理学あるいは治療法の領域で最も重要にして画期的な発見、発明に3年おきに賞金を与えることを記していた。

さらに、この遺言は以下のように続いていた。

「私の財産の残りの全部をストックホルムの科学アカデミーに遺贈し、基金を設け、その利子をアカデミーから各年賞金として生理学および医学以外の広範な知識と進歩の分野における最も重要にして画期的な発見または知的業績に対して分配すること。絶対的な条件とするものではないが、私の希望では、ヨーロッパの平和裁判所設立に対して国民および政府の依然として抱く奇異なる偏見に言葉と行動をもって有効に闘っている人々に特に考慮を払うことである。私が明確に希望するのは、この遺言書で企図する賞はすべてスウェーデン人たると外国人たるとを問わず、また男女の別を問わず、最も功績ある人に授与されるべきことである。」¹¹⁾

以上のように、この1893年遺言では、その後のノーベル賞に関係する点では、生理学、医学分野ではカロリンスカ研究所が、それ以外ではストックホルムの科学アカデミーが基金に基づく利子で賞金を最も重要な発見、発明に出すことになっていた。また、ヨーロッパの平和裁判所設立に尽力する人々も考慮することが希望として述べられていた。

平和賞関連の内容だけ取り上げても、1893年と1895年の遺言との間には大きな相違がある。まず1893年の遺言にあるオーストリア平和協会への遺贈が1895年の遺言ではなくなっている。平和賞の対象は1893年の遺言では「ヨーロッパの平和裁判所設立」に限定されていたが、1895年の遺言ではより広く「諸国民間の友好、常備軍の廃止または削減、平和会議の開催や推進」に拡大している。さらにこの平和賞に関しては、1893年の遺言ではストックホルムの科学アカデミーが専門外ともいえる立場で担当させられることになっていたが、1895年の遺言では新たに「ノルウェー国会の選出する5名の委員会」が登場するのである。このように、わずか2年半ほどの間に、ノーベル平和賞の具体化に向けて前進がみられたのである。

(3) ノーベル平和賞の創設

ノーベルが平和賞を賞の一分野にした理由については、ノーベル自身が説明しているわけではないため明確ではない。ノーベルは子供時代以来、平和への関心を持ち続け、戦争を憎悪していた。それに加えて、ノーベルの生前の交友関係の中にオーストリアの女性作家、平和運動家のフォン・ズットナー（Bertha Sophie Felicita von Suttner）がおり、彼女に影響された面も否定できない¹²⁾。特に、晩年のノーベルは彼女との文通の中で軍縮問題、平和問題についても積極的に意見を交わし、自身の考えを深めていった。彼女への1893年1月書簡では、遺産による平和賞創設について言及している。その平和賞は男女を問わず、ヨーロッパの平和の実現に最大の功績のあった人物に5年に1度（一応、6回）授与するというものであった¹³⁾。ここに、ノーベルの1893年遺言、1895年遺言に登場する平和賞の原型を見出せる。さらに1893年遺言にはオーストリア平和協会が出てくるが、これも彼女の影響と考えられる。彼女は、常設国際平和局（Permanent International Peace Bureau）の会長も務め、1905年に長年の平和運動を理由としてノーベル平和賞を授与されている。

また、ノーベルが賞の選考母体を平和賞のみスウェーデンの団体ではなく、「ノルウェー国会の選出する5名の委員会」としたことも詳しいことは不明である。様々な説があるが、たとえばスウェーデンとノルウェーは1905年まで同君連合として1国家を形成しており、ノルウェー側にも選考の権利を与えようとしたこと、ノルウェー政府、国会が国際紛争の仲介や解決に関心をもち、貢献をしていたこと、ノーベルがノルウェー文学に傾倒し、平和運動にも熱心であったビョルンソン（Bjørnstjerne Martinus Bjørnson、1903年ノーベル文学賞受賞）に影響されたことなどが指摘されている¹⁴⁾。

ノーベルの1895年遺言は、ストックホルムのエンシルダ銀行に保管されており、1897年1月に存在が一般に明らかにされた。その後、遺言に遺産執行者として明記されていたノーベルの助手、ソールマン（Ragnar Sohlman）と技術者のリリエクヴィスト（Rudolf Lilljequist）は、遺言に従い世界中にあった工場や財産の整理を誠実に行なった¹⁵⁾。これにはまずノーベルの親族から理解を得ることが必要であり、さらに財産のあった多数の国の法令に従い処理が必要であったため、作業は難航を極めた。しかも財産を整理した後も、できた基金（総額約3100万スウェーデン・クローナ。以下、クローナ）を誰が管理するかで彼らは頭を悩ませた。遺言にはかかる記述がなかったからである。苦労の末に1900年6月29日付けで「ノーベル財団規約」と賞授与機関の「特別規則」¹⁶⁾がスウェーデン国王オスカル2世（Oscar II）により認可され、ノーベル財団が設立された。同財団はノーベルの基金を管理し、ノーベル賞の運営を行なうことになった。財団の本部はスウェーデンのストックホルムにおかれている。また、ソールマンとリリエクヴィストは、ノーベルが遺言で言及した各選考母体とも接触し、賞の選考について了解を得るとともに、選考手続きの整備を行なったのである。たとえば、遺言に「ストックホルムのアカデミー」と書かれ、実体が不明確であった文学賞の選考母体は、スウェーデン・アカデミーのこととして処理された。

なお、ノーベルの発案したノーベル賞の構想について、スウェーデン国内では批判もあった¹⁷⁾。スウェーデンの新聞、政治家、国王、ノーベルの親族も当初こうした国際的な賞に批判的であった。たとえば、賞の受賞者をスウェーデン人に限定していなかったため、愛国主義の欠如と批判された。また、平和賞の選考をノルウェーの国会に任せただけでも同君連合の解体をめぐる緊張するスウェーデン・ノルウェー関係の観点から批判された。ノーベルの親族からは遺産の清算方法や遺産額について不満が出た。ノーベル自身は、世界中でビジネスを行ない、スウェーデン国外に長く住み、外国語にも不自由せず、妻も子供もいなかったことから、自然な発想で国際的な賞の創設を思いついたのであろう。

こうして、ようやくノーベル賞を実際に授与する体制が整い、ノーベルの死から5年後の命日である1901年12月10日、第1回目のノーベル賞が授与されたのである。ノーベル賞はまさに20世紀最初の年に産声を上げたのである。それ以来、現在までノーベル賞は1世紀以上も継続している。その理由としては、まず第1に賞の選考が厳正に行なわれ、時代とともに賞の評価を高めてきた歴史がある。それは、歴代受賞者の顔ぶれをみれば、全体的に選考が高く評価されているのもわかるであろう。第2に、ノーベル財団による基金の運営が成功し、財政が安定していることもノーベル賞継続の理由として見逃せない。第二次世界大戦以前は不況、インフレ、戦争など様々な困難に直面し、基金自体が影響を受け、賞金額も大きく変動している。1901年に各賞の賞金は15万782クローナで始まったが、1923年には11万4935クローナまで下がり（史上、最低額）、その後も増減を繰り返した¹⁸⁾。しかし、第二次世界大戦後、受賞者に与えられる賞金額は着実に増加してきた。2001年以来2010年まで、賞金額は1000万クローナ（2010年12月10日のレートで約1億2560万円）となっている。これはノーベル賞の歴史上、最高額である。このように、ノーベル財団が基金を維持、発展させてきた手腕は高く評価されてよい。これは、遺言では安全な運用が求められていたが、1958年以降、長期の債券のみならず外国の株式などにも自由に投資を始めた結果である。しかし、基金の運用益は年によって変動し、たとえば2008年夏以来のリーマン・ショックによる世界的不況のため、ノーベル財団も株式投資で損失を出したといわれる¹⁹⁾。これは基金の運用がいかに難しいかを印象づける話である。

2 ノーベル平和賞の選考過程

(1) 選考対象

本章では、ノーベル平和賞の選考過程について概観しておきたい。まず選考対象であるが、前章でみたように、ノーベルの1895年遺言によれば「その前年に人類に最大の利益をもたらした人たちに」、特に平和賞については「諸国民間の友好、常備軍の廃止または削減、平和会議の開催や推進のために最大もしくは最善の活動をした人物」に賞金を授与することになっていた。この遺言の文言は、1900年のノーベル財団規約にも取り込まれており、ノーベル平和賞の正式な

選考対象とみることができよう。

しかし、その後の110年にも及ぶノーベル平和賞の発展を考えると、ノーベルがイメージしていた「平和」は国家間の戦争と平和に限定されたものであり、19世紀末という時代を反映していたものと考えられる。実際に時代が過ぎるとともに、平和賞の対象とする「平和」に変化が生じている。すなわち、ノルウェーのノーベル委員会が各時代の受賞者を選考する過程で、受賞理由の「平和」は大きく拡大されてきているのである。たとえば、国内の表現の自由の保障、独裁政治への抵抗、人種差別の撤廃、基本的人権の保障、少数民族の保護、途上国の経済発展、環境保護なども平和賞の対象となっているのである。これに示されるように、ノーベル平和賞において「平和」は固定的なものではなく、時代とともに変化するものである。

(2) 選考委員

次にノーベル平和賞は誰が選ぶのであろうか。選考に直接かかわる主体をみてみよう。ノーベルの1895年遺言には、平和賞は「ノルウェー国会が選出する5名の委員会」により選考されると記されていたが、1901年以降、実際に開始された平和賞はこの文言通りに選考を行ってきた（同委員会にはノーベル研究所所長がノーベル委員会の書記として同席）。1905年のノルウェー・スウェーデンの同君連合解消後は、スウェーデンとは別国家であるノルウェーの国会が任命するノーベル委員会が単独で選考を担ってきた。選考においてスウェーデン側の意向が反映されず、独立した賞という点で、ノーベル賞の中で平和賞は異色の存在である。

ノーベル委員会の5名は、国会に議席をもつ政党の勢力を反映した形で任命され、政党色をもっている。政府与党の推薦する委員だけで構成される訳ではないことに注意する必要がある。任期は6年であり、3年ごとに入れ替えが行なわれるが、再任可であるため²⁰⁾、長期間、委員を務める者が多い。委員の国籍は、ノルウェー国籍をもつ者に限定されないが、これまでノルウェー人が任命されてきた。この5名の委員は、当初は現職閣僚も可能であった。しかし、1936年にドイツのオシエツキー（Carl von Ossietzky）が1935年分の平和賞を受賞した際、これを批判する当時のナチス・ドイツのヒトラーとの間で生々しい政治問題を引き起こすことになった²¹⁾。そのため、1937年以降、現職閣僚が委員を兼任することはなくなった²²⁾。さらに、1977年に委員の任命規定が変更され、現職国会議員も除外されることになった。委員会の正式名称も同年に「ノルウェー国会ノーベル委員会（Den Norske Stortings Nobelkomite）」から「ノルウェー・ノーベル委員会（Den Norske Nobelkomite）」に変更された。この変更の背景には、1973年のノーベル平和賞がキッシンジャー国務長官に与えられ、これに抗議して委員2名が辞任した騒動があり、ノルウェー国会からの独立性を明確にする意味があった。

ノーベル委員会は、完全に独立した機関であり、受賞者の選考・決定においてどこからも指示や命令を受けないとされている。それを裏付けるように、ノーベル委員会委員と政府、国会との関係は徐々に離れ、ノーベル委員会の独立性、中立性が強化されてきたとみなすことができる。

しかし、ノルウェー国会が政党色をもつ委員を任命することは変わらない慣行であり、ノーベル委員会が政治色を完全に払拭することは依然として困難であろう。現在でも、現職の閣僚、国会議員はいないものの、元首相、元閣僚、元党首、元国会議員など政界の有力者が委員となっている。そのため、ノーベル委員会と政府、政党との間の人的な関係は極めて緊密である。

(3) 推薦資格

ノーベル平和賞候補の推薦者となるためには、以下の推薦資格を満たす必要がある²³⁾。ノーベル委員会の選考の過程では、推薦者の資格についてもチェックがなされている。

- ・国会議員および政府閣僚
- ・国際裁判所判事
- ・大学学長、社会科学・歴史・哲学・法律・神学の大学教授、平和研究所・外交政策研究所の所長
- ・ノーベル平和賞の受賞者
- ・ノーベル平和賞を授与された団体の執行委員
- ・ノルウェー・ノーベル委員会の現職委員・元委員
- ・ノルウェー・ノーベル研究所に任命された元アドバイザー

(4) 選考過程

選考の過程を時系列に沿って追ってみよう。ノーベル財団のホームページによれば、ノーベル平和賞の選考から授与に至る作業は以下の日程で進められる²⁴⁾。

- ・前年9月：推薦依頼状の発送

前年9月に上記の推薦資格者にノーベル委員会から推薦依頼状が発送される。以後、推薦資格者が推薦状を書くことになるが、平和賞の対象となる候補は個人でも団体でもよい。この点は、個人のみが候補となる、その他のノーベル賞と大きく異なる。

- ・2月1日：推薦状提出期限

推薦状は、ノーベル委員会に2月1日にそれ以前の消印で到着していなければならない。その後の消印あるいは到着分の推薦状は、翌年の選考に回されることになる。表1は、史料が完全に公開されている1901年から1960年までのノーベル平和賞候補数を表にしたものである。世界大戦中とその直後を除くと、候補数は20台から50台を推移している。しかし、近年の候補数は200に上っている。2009年の選考で205候補（うち33が団体）が推薦され、初めて200台となり、2010年の選考では237候補（うち38が団体）となっている²⁵⁾。この2010年は、史上最高の候補数である。これは、ノーベル平和賞への関心の高まりを示すものといえよう。なお、候補は重複して推薦されることも多いため、実際に提出される推薦状は候補数よりもずっと多い。選考にあたり、推薦状数の多い候補が有利とは限らない。

表1 ノーベル平和賞候補数

西暦	ノーベル平和賞候補数		
	人物	団体	合計
1901	29	6	35
1902	22	5	27
1903	20	5	25
1904	18	4	22
1905	17	7	24
1906	23	6	29
1907	20	2	22
1908	24	7	31
1909	23	3	26
1910	24	5	29
1911	28	6	34
1912	27	8	35
1913	41	10	51
1914	27	4	31
1915	28	10	38
1916	13	10	23
1917	12	6	18
1918	11	9	20
1919	10	3	13
1920	14	5	19
1921	10	2	12
1922	26	7	33
1923	26	9	35
1924	23	8	31
1925	19	8	27
1926	27	6	33
1927	21	5	26
1928	21	3	24
1929	26	6	32
1930	30	9	39
1931	33	10	43
1932	35	7	42
1933	47	8	55
1934	43	7	50
1935	31	7	38
1936	38	8	46
1937	32	8	40
1938	28	11	39
1939	20	4	24
1940			
1941	3	0	3
1942			
1943			
1944			
1945	} 1	3	4
1946	8	3	11
1947	15	5	20
1948	21	2	23
1949	23	6	29
1950	28	6	34
1951	29	7	36
1952	27	4	31
1953	33	5	38
1954	19	5	24
1955	32	5	37
1956	23	5	28
1957	22	3	25
1958	21	5	26
1959	27	5	32
1960	31	0	31

出所：Det Norske Stortings Nobelkomité, Redegjørelse for Nobel Fredspris, 1901-1960およびノーベル財団ノミネーション・データベース
 <http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/nomination/>より、筆者作成。

・2月～3月：候補の「ショート・リスト」の準備

ノーベル委員会は、推薦された候補の活動を評価し、候補を絞り込んだ「ショート・リスト」を準備する。

・3月～8月：アドヴァイザーによる見直し

ノーベル研究所の任命する常任アドヴァイザーと特定候補について知識をもつ特任アドヴァイザーが「ショート・リスト」の各候補について調査を行ない、報告書を作成し、候補を見直す。アドヴァイザーは、直接推薦を評価することはなく、はっきりとした勧告を行なうこともない。各アドヴァイザーには、社会科学系の学者が任命されることが多い。

・10月：決定・発表

10月初めにノーベル委員会は多数決でノーベル平和賞受賞者を選出する。受賞者は3名まで共同受賞できる。決定は最終的なもので、覆ることはない。受賞者の氏名が発表される。1974年以降は、受賞発表前に死去した候補は選考対象から外されることになった。それ以前は、選考段階で死去していても、選考の対象となった。実際に1961年に平和賞を受賞したハマーショルド(Dag Hjalmar Agne Carl Hammarskjöld)国連事務総長は、受賞発表前の同年9月18日に航空機事故で死去していた。なお、受賞発表後に受賞者が死去した場合は、その受賞は有効である。以上の選考過程において、候補、推薦人の具体的な氏名等の選考にかかわるすべての情報は、50年間、非公開とされている。

・12月10日：授賞式

平和賞はノーベルの命日である12月10日にノルウェーのオスロで授賞式が開催される。その他のノーベル賞は同日スウェーデンのストックホルムですべての行事を行なうため、平和賞は全く単独の授賞式となる。授賞式には、受賞者、ノーベル委員会関係者のほか、ノルウェー国王、政府閣僚、国会議員、ノルウェー駐在外交団など様々な人々が出席する。

授賞式の会場は、時代とともに変更されてきた。1901年から1904年まではノルウェー国会本会議場で、1905年から1946年まではノーベル研究所で、1947年から1989年まではオスロ大学講堂²⁶⁾、1990年からはオスロ市庁舎ホール

で開催されてきた。どの会場もオスロ市内中心部にある。受賞者は、平和賞のメダル、賞状を受け取る（その他、賞金額を記入した小切手も別途受け取る）。

授賞式の夜は、受賞者を囲む晩餐会が受賞者の泊まるグランド・ホテルで開かれる。受賞者は「ノーベル・レクチャー」といわれる受賞記念スピーチをするのが義務である。

以上のノーベル平和賞にかかわる一連の行事はすべてオスロで完結し、ストックホルムで行なわれる平和賞以外のノーベル賞の行事との間に接点はない。

3 歴代受賞者の特徴

(1) 個人・団体、性別

ノーベル平和賞の歴代受賞者を一覧にしたものが、表2である。歴代受賞者にいかなる特徴が見出せるであろうか。本章では、個々の歴代受賞者ではなく、基本的な属性を中心に特徴を整理しておきたい。

前述のように、平和賞の場合、個人でも団体でも受賞者となることができる。表2のように、1901年から2010年までの110年間に個人は37カ国・地域の98名に授与された。その98名のうち、男性は86名、女性は12名であり、圧倒的に男性優位ということができよう²⁷⁾。初の女性受賞者は、第1章の歴史にも登場した1905年のフォン・ズットナーであった。ノーベルと直接面識があり、ノーベル平和賞創設にもかかわりをもったことがプラスに作用した結果であろう。その次の女性受賞者は1931年のアメリカのアダムス (Jane Addams) であり、さらにそれに続く受賞者が1946年のアメリカのボルチ (Emily Greene Balch)、1976年の北アイルランドのウィリアムズ (Betty Williams)、コリガン (Mairead Corrigan) であったことを考えると、ノーベル平和賞において女性に女性が受賞者となるのが困難であったかがわかる。しかし、1970年代後半以降、女性受賞者が急増している。この理由として国際社会で平和のために活躍する女性が急に増えたとは考えにくい。恐らく、ノルウェーをはじめとする先進国において性差別への批判が強まり、女性の活動を積極的に評価しようという意識の変化がノーベル委員会の委員にも浸透した結果であろう。

ノーベル平和賞は、23団体にも授与されている。受賞する団体も時代とともに増加する傾向にある。国際社会において様々な国際組織が生まれ、平和に貢献している現状を反映するものであろう。特に、国連などの政府間国際組織のみならず、NGO（非政府組織）といわれる民間団体も存在感を増している現実が浮かび上がってくる。しかし、団体の創立地・所在地をみた場合、欧米諸国中心である。非欧米諸国の事例としては、唯一2006年のグラミン銀行（バングラデッシュ）があるのみである。

個人、団体を問わず、歴代受賞者は単独、あるいは2名の共同受賞が多い。3名の共同受賞は、1994年のアラファト (Yasser Arafat)、ペレス (Shimon Peres)、ラビン (Yitzhak Rabin) の受賞のみである。これは自然科学系のノーベル賞で3名の受賞が多いことと対照的な結果である。

表 2 ノーベル平和賞歴代受賞者一覧

授与年	ノーベル平和賞受賞者				
	個人名	国籍	性別 (男性M, 女性F)	団体名	創立地・所在地
1901	デュナン (Jean Henry Dunant)	スイス	M		
	パシー (Frédéric Passy)	フランス	M		
1902	デュコマン (Élie Ducommun)	スイス	M		
	ゴバ (Charles Albert Gobat)	スイス	M		
1903	クリーマー (William Randal Cremer)	イギリス	M		
1904				国際法学会	ベルギー ヘント
1905	フォン・ズットナー (Bertha Sophie Felicita von Suttner)	オーストリア		F	
1906	ルーズベルト (Theodore Roosevelt)	アメリカ	M		
1907	モネータ (Ernesto Teodoro Moneta)	イタリア	M		
	ルノー (Louis Renault)	フランス	M		
1908	アルノルドソン (Klas Pontus Arnoldson)	スウェーデン	M		
	バイエル (Fredrik Bajer)	デンマーク	M		
1909	ペールナールト (Auguste Marie François Beernaert)	ベルギー	M		
	デストゥルネイユ・ドゥ・コンスタン (D'Estoumelles de Constant)	フランス	M		
1910				常設国際平和局	スイス ベルン
1911	アッセル (Tobias Michael Carel Asser)	オランダ	M		
1912	フリード (Alfred Hermann Fried)	オーストリア	M		
1913	1912年度分 ルート (Elihu Root)	アメリカ	M		
1914	1913年度分 ラフォンテーヌ (Henri La Fontaine)	ベルギー	M		
1915	1914年度分は該当者なし				
1916	1915年度分は該当者なし				
1917	1916年度分は該当者なし				
1918	1917年度分は該当者なし			赤十字国際委員会	スイス ジュネーブ
1919	1918年度分は該当者なし				
1920	1919年度分 ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson)	アメリカ	M		
1921	1920年度分 ブルジョア (Léon Victor Auguste Bourgeois)	フランス	M		
1922	ブランティング (Karl Hjalmar Branting)	スウェーデン	M		
1923	ランゲ (Christian Lous Lange)	ノルウェー	M		
1924	ナンセン (Fridtjof Nansen)	ノルウェー	M		
1925	1923年度分は該当者なし				
1926	1924年度分は該当者なし				
1927	1925年度分 チェンバレン (Austen Chamberlain)	イギリス	M		
1928	1925年度分 ドーズ (Charles Gates Dawes)	アメリカ	M		
1929	1926年度分 ブリアン (Aristide Briand)	フランス	M		
1930	1926年度分 シュトレゼマン (Gustav Stresemann)	ドイツ	M		
1931	1927年度分 ビュイソン (Ferdinand Buisson)	フランス	M		
1932	1928年度分 クヴィッデ (Ludwig Quidde)	ドイツ	M		
1933	1929年度分 ケロッグ (Frank Billings Kellogg)	アメリカ	M		
1934	1930年度分 セーデルブロム (Nathan Söderblom)	スウェーデン	M		
1935	1931年度分 アダムス (Jane Addams)	アメリカ		F	
1936	1932年度分 バトラー (Nicholas Murray Butler)	アメリカ	M		
1937	1933年度分は該当者なし				
1938	1933年度分 エンジェル (Norman Angell)	イギリス	M		
1939	1934年度分 ヘンダーソン (Arthur Henderson)	イギリス	M		
1940	1935年度分 フォン・オシエツキー (Carl von Ossietzky)	ドイツ	M		
1941	1936年度分 サアベドラ・ラマス (Carlos Saavedra Lamas)	アルゼンチン	M		
1942	1937年度分 セシル・オブ・チェルウッド (Cecil of Chelwood)	イギリス	M		
1943	1938年度分は該当者なし			ナンセン国際難民事務所	スイス ジュネーブ
1944	1939年度分は該当者なし				
1945	1940年度分は該当者なし				
1946	1945年度分 ハル (Cordell Hull)	アメリカ	M		
1947	1946年度分 ボルチ (Emily Greene Balch)	アメリカ		F	
1948	1947年度分 モット (John Raleigh Mott)	アメリカ	M		
1949	1948年度分は該当者なし			フレンズ・サービス協議会 アメリカ・フレンズ・サービス委員会	イギリス ロンドン アメリカ ワシントン
1950	1949年度分 ボイド・オア (John Boyd Orr of Brechin)	イギリス	M		
1951	1950年度分 バンチ (Ralph Bunche)	アメリカ	M		
1952	1951年度分 ジュオー (Léon Jouhaux)	フランス	M		
1953	1952年度分 シュヴァイツァー (Albert Schweitzer)	フランス	M		
1954	1953年度分 マーシャル (George Catlett Marshall)	アメリカ	M		
1955	1954年度分は該当者なし				

ノーベル賞の国際政治学

1955	保留				1954年度分 国連難民高等弁務官事務所	スイス	ジュネーブ
1956	1955年度分は該当者なし						
	保留						
1957	1956年度分は該当者なし						
1957	1957年度分 ビアソン (Lester Bowles Pearson)	カナダ	M				
1958	ピール (Georges Pire)	ベルギー	M				
1959	ノエル=ペーカー (Philip John Noel-Baker)	イギリス	M				
1960	保留						
1961	1960年度分 ルトゥーリ (Albert John Lutuli)	南アフリカ連邦	M				
	ハマershヨルド (Dag Hjalmar Agne Carl Hammarskjöld)	スウェーデン	M				
1962	保留						
1963	1962年度分 ポーリング (Linus Carl Pauling)	アメリカ	M		1963年度分 赤十字国際委員会	スイス	ジュネーブ
					1963年度分 赤十字社連盟	スイス	ジュネーブ
1964	キング (Martin Luther King, Jr.)	アメリカ	M				
1965	保留				国連児童基金 (UNICEF)	アメリカ	ニューヨーク
1966	保留						
1967	1966年度分は該当者なし						
	保留						
1968	1967年度分は該当者なし						
1968	1968年度分 カサン (René Cassin)	フランス	M				
1969	保留				国際労働機関 (ILO)	スイス	ジュネーブ
1970	ボーローグ (Norman Borlaug)	アメリカ	M				
1971	ブランド (Willy Brandt)	西ドイツ	M				
1972	保留						
	1972年度分は該当者なし						
1973	1973年度分 キッシンジャー (Henry A. Kissinger)	アメリカ	M				
	1973年度分 レ・ドゥック・ト (Le Duc Tho) 受賞辞退	北ヴェトナム	M				
	マクブライド (Sean MacBride)	アイルランド	M				
1974	佐藤栄作	日本	M				
1975	サハロフ (Andrei Dmitrievich Sakharov)	ソ連	M				
1976	保留						
	1976年度分 ウィリアムズ (Betty Williams)	イギリス (北アイルランド)	F				
	1976年度分 コリガン (Mairead Corrigan)	イギリス (北アイルランド)	F				
1977	保留				1977年度分 アムネスティ・インターナショナル	イギリス	ロンドン
1978	サダト (Mohamed Anwar Al Sadat)	エジプト	M				
	ベギン (Menachem Begin)	イスラエル	M				
1979	マザー・テレサ (Mother Teresa)	インド	F				
1980	ペレス・エスキヴェル (Adolfo Pérez Esquivel)	アルゼンチン	M				
1981	保留				国連難民高等弁務官事務所	スイス	ジュネーブ
1982	ミュルダール (Alva Myrdal)	スウェーデン	F				
1982	ガルシア・ロブレス (Alfonso Garcia Robles)	メキシコ	M				
1983	ワレサ (Lech Walesa)	ポーランド	M				
1984	トゥトゥ (Desmond Mpiilo Tutu)	南アフリカ連邦	M				
1985	保留				核戦争防止のための国際医学者組織	アメリカ	ボストン
1986	ウィーゼル (Elie Wiesel)	アメリカ	M				
1987	アリアス・サンチェス (Oscar Arias Sánchez)	コスタリカ	M				
1988	保留				国連平和維持軍	アメリカ	ニューヨーク
1989	第14世ダライ・ラマ (Dalai Lama)	チベット	M				
1990	ゴルバチョフ (Mikhail Sergeyevich Gorbachev)	ソ連	M				
1991	アウン・サン・スー・チー (Aung San Suu Kyi)	ビルマ	F				
1992	メンチュ・ツム (Rigoberta Menchú Tum)	グアテマラ	F				
1993	マンデラ (Nelson Mandela)	南アフリカ連邦	M				
	デ・クラーク (Frederik Willem de Klerk)	南アフリカ連邦	M				
1994	アラファト (Yasser Arafat)	パレスチナ	M				
	ペレス (Shimon Peres)	イスラエル	M				
	ラビン (Yitzhak Rabin)	イスラエル	M				
	ロートブラット (Joseph Rotblat)	イギリス	M				
1995	保留				科学と世界問題に関するバグウォッシュ会議	カナダ	バグウォッシュ
1996	ベロ (Carlos Filipe Ximenes Belo)	東チモール	M				
	ラモス=ホルタ (José Ramos-Horta)	東チモール	M				
1997	保留				地雷禁止国際キャンペーン (ICBL)	アメリカ	
	ウィリアムズ (Jody Williams)	アメリカ	F				
1998	ヒューム (John Hume)	イギリス (北アイルランド)	M				
	トリンブル (David Trimble)	イギリス (北アイルランド)	M				
1999	保留				国境なき医師団	ベルギー	
2000	金大中 (Kim Dae-jung)	大韓民国	M				
2001	保留				国連	アメリカ	ニューヨーク
	コフィ・アナン (Kofi Annan)	ガーナ	M				
2002	カーター (James Earl (Jimmy) Carter)	アメリカ	M				
2003	エバディ (Shirin Ebadi)	イラン	F				
2004	マータイ (Wangari Maathai)	ケニア	F				
2005	保留				国際原子力機関 (IAEA)	オーストリア	ウィーン
	エルバラダイ (Mohamed ElBaradei)	エジプト	M				
2006	ユヌス (Muhammad Yunus)	バングラデッシュ	M				
	保留				グラミン銀行	バングラデッシュ	
	保留				気候変動に関する政府間パネル (IPCC)	スイス	ジュネーブ
2007	ゴア (Albert Arnold (Al) Gore, Jr.)	アメリカ	M				
2008	アハティサーリ (Martti Ahtisaari)	フィンランド	M				
2009	オバマ (Barack Hussein Obama)	アメリカ	M				
2010	劉暁波 (Liu Xiaobo)	中華人民共和国	M				
合計	98名 (辞退者1名を含む)	37 ヵ国・地域	86名	12名			23団体

出所：ノーベル財団ホームページ<http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/laureates/>などから、筆者作成。

(2) 地域差

受賞者の地域差の問題は、個人についてもあてはまる。すなわち、男女を問わず個人の受賞者は、1901年の平和賞発足以来、圧倒的に欧米諸国出身者であった。それ以外の地域に受賞者が広がるには長い時間が必要であった。まずは1936年にアルゼンチンのサアベドラ・ラマス(Carlos Saavedra Lamas)により南米に拡大し、1961年に南アフリカ連邦のルトウーリ(Albert John Lutuli)によりアフリカに拡大している。アジアへの拡大は、1973年の北ヴェトナムのレ・ドゥク・ト(Le Duc Tho)により初めて達成されたかのように思われたが、彼が受賞を辞退したために、翌年の日本の佐藤栄作まで待たされたのである。その後、中東、ソ連(ロシア)を含めて多様な地域の人々が受賞者となっている。

このように、ノーベル平和賞は欧米諸国中心から全世界へというグローバル化の道を徐々に歩んできたのである。アフリカ、アジア地域の受賞者が登場するのは、1960年代、70年代以降である。上記の性別の問題と同様に、ノーベル平和賞のグローバル化には長い時間が必要であった。それは、まさにノーベル委員会委員が意識を変革し、世界の多様な地域に関する情報を蓄積し、理解するために必要な時間であったのであろう。

(3) 受賞者のいない年

表2の一覧をみた際、目につく表示は「保留」、「該当者なし」、「中止」である。これらの年には、受賞者はいなかった。ノーベル平和賞の110年の歴史において、「保留」は27回、「該当者なし」は15回、「中止」は4回である。最終的に受賞者のいなかった年は、19回になる。他の分野のノーベル賞をみると、受賞者のいなかった年は生理学・医学賞9回、化学賞8回、文学賞7回、物理学賞6回、経済学賞0回である²⁸⁾。このように、平和賞は他の賞に比べて受賞者のいない年が極めて多いのである。この理由としては、ノーベル平和賞が国際情勢の影響を直接受けることが指摘できるであろう。「保留」、「該当者なし」、「中止」の表示は、第一次世界大戦、第二次世界大戦、冷戦の時期に多い。戦争や厳しい緊張状態にある国際情勢下では、平和賞に値する受賞者を見出すことは極めて困難であったであろう。さらに、敵対する陣営の一方からの批判をできる限り避けることも考慮されたかもしれない。特に、第二次世界大戦中、ノルウェーはドイツによる占領下におかれ、国王、政府がロンドンに亡命せざるを得なかったが、ノーベル委員会委員の一部も亡命していた。

平和賞が他の分野のノーベル賞とは異なり、「平和」という政治的な色彩を強くもつ賞である限り、こうした問題は今後もついて回ることになるだろう。

おわりに

以上、ノーベル平和賞の創設の歴史、選考過程、歴代受賞者の特徴を簡単に整理してきた。ノーベル平和賞は、他の分野のノーベル賞と比較すると、独自の発展を遂げてきたといえよう。この賞のみ、ノルウェー国会の選出する5名の委員からなるノーベル委員会が選考を行なう。他の分野のノーベル賞ではスウェーデン科学アカデミー、カロリンスカ研究所、スウェーデン・アカデミーという専門家の団体が主導するのに対して、ノーベル平和賞ではノーベル委員会の5名の委員が選考の最初から最後まですべての過程に関わり、決定権をもつのである。そのため、各委員の果たす役割は極めて大きい。ノーベル平和賞の歴代受賞者をみてもわかるように、その選考基準は客観的なものというよりも、ノーベル委員会委員の政治的な判断というべきものであろう。また、ノーベル委員会の委員は過去においてはノルウェーの現職閣僚、現職国会議員も務めてきた。現在でも、有力な元政治家が委員の大半を占めている。そのため、ノーベル委員会の活動は、ノルウェー政府の外交政策との関係も無視できない。

以上の点を考えるならば、ノーベル賞において平和賞は特別な存在であり、他の分野のノーベル賞とは異なる視点から考察する必要がある。それは、まさに本稿の最初に述べた国際政治学からの視点である。かかる視点から、歴代受賞者の役割、ノーベル委員会の役割をさらに深く実証的に考察する必要がある。これらは今後の課題としたい。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

註

- 1) ノーベルの1895年11月27日付け遺言。同遺言(抜粋)は巻末資料を参照。
- 2) 岡本拓司「ノーベル賞文書からみた日本の科学 1901—1948年」(『科学技術史』第4号、2000年)。同「日本人とノーベル物理学賞 1901年—1949年」(『日本物理学会誌』第55巻第7号、2000年)。
- 3) 以下は数少ない学術的な研究であり、平和賞にも1章を割いている。矢野暢『ノーベル賞——二十世紀の普遍言語——』(中公新書、1988年)、162～187頁。
- 4) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：序説——」(『地域政策研究』第12巻第4号、2010年3月)。同「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦前の日本人候補——」(『地域政策研究』第13巻第2・3号、2010年11月)。
- 5) ノーベル財団ノミネーション・データベース<http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/nomination/database.html>、2010年12月1日確認。同データベースは推薦状況を検索する上で貴重なものではあるが、人名等の誤表記も多く、ノーベル研究所の史料による確認が欠かせない。
- 6) ノーベル財団規約第10条(ノーベル財団ホームページ<http://nobelprize.org/nobel_organizations/nobel_foundation/statutes.html>、2010年12月1日確認)。
- 7) ノーベルとノーベル賞についての基本的な文献は、前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：序説——」、24～27頁を参照。英語、邦語の文献では、以下が重要である。Ragnar Sohlman and Henrik Schück, *Nobel: Dynamite and Peace* (New York: Cosmopolitan Book Corporation, 1929)。H. Schück, R. Sohlman et al., *Nobel: The Man and His Prizes* (Norman: University of Oklahoma Press, 1951)。Ragnar Sohlman, *The Legacy of Alfred Nobel: The Story behind the Nobel Prizes* (London: The Bodley Head, 1983)。H・シュツク、R・ゾルマン『大ノーベル傳』菊池武一訳(東峰書房、1942年)。エリック・ベルイェンゲレン『ノーベル伝』松谷健二訳(白水社、1968年)。
- 8) Norra Begravningsplatsen。ノーベルの墓の番号は、Kv. 4A, 170である。
- 9) 遺言全文については、以下を参照。Ragnar Sohlman, *The Legacy of Alfred Nobel: The Story behind the Nobel Prizes*, pp.136-139。内容については、以下を参照。Ragnar Sohlman and Henrik Schück, *Nobel: Dynamite and Peace*, chapter 12。H・シュ

- ツク、R・ゾルマン、前掲『大ノーベル傳』、第12章。
- 10) Ragnar Sohlman and Henrik Schück, *Nobel: Dynamite and Peace*, p.240. Ragnar Sohlman, *The Legacy of Alfred Nobel: The Story behind the Nobel Prizes*, pp.92-94.
 - 11) Ragnar Sohlman and Henrik Schück, *Nobel: Dynamite and Peace*, p.241.
 - 12) エリック・ベルイェングレン、前掲『ノーベル伝』、217～229頁。同書は、ノーベルの平和への関心がフォン・ズットナーにより初めて生じたのではないとの見方を示し、彼女の役割を重要なものではあるが、彼女自身が回想録で主張するほど決定的とはみていない(同上、221頁)。同様の主張をノーベル研究所のショウ所長(任期1947～1973年)もしている(August Schou, "The Peace Prize," in H. Schück, R. Sohlman et al., *Nobel: The Man and His Prizes*, p.475.)。
 - 13) Henrik Schück, "Alfred Nobel, A Biographical Sketch," in H. Schück, R. Sohlman et al., *Nobel: The Man and His Prizes*, p.23. エリック・ベルイェングレン、前掲『ノーベル伝』、228頁。
 - 14) August Schou, "The Peace Prize," in H. Schück, R. Sohlman et al., *Nobel: The Man and His Prizes*, p.477.
 - 15) ノーベルの死去からノーベル財団設立までの経緯については、以下を参照。Ragnar Sohlman, *The Legacy of Alfred Nobel: The Story behind the Nobel Prizes*, pp.79-135.
 - 16) 1900年当時の「ノーベル財団規約」と「特別規則」については、以下を参照。H. Schück, R. Sohlman et al., *Nobel: The Man and His Prizes*, pp.582-602。現行のものは、ノーベル財団ホームページ<http://nobelprize.org/nobel_organizations/nobel_foundation/statutes.html>、2010年12月1日確認)を参照。
 - 17) Ragnar Sohlman, *The Legacy of Alfred Nobel: The Story behind the Nobel Prizes*, pp.83-85, 132-133.
 - 18) ノーベル財団ホームページ<http://nobelprize.org/nobel_prizes/about/amounts.html?print=1>、2010年12月1日確認。
 - 19) 「ノーベル賞賞金引き下げも」(『朝日新聞』2009年12月7日夕刊)。
 - 20) 「ノーベル平和賞の授与とノルウェー・ノーベル研究所の特別規則」第1条(ノーベル財団ホームページ<http://nobelprize.org/nobel_organizations/nobel_foundation/statutes-no.html?print=1>、2010年12月1日確認)。
 - 21) Irwin Abrams, *The Nobel Peace Prize and the Laureates: An Illustrated Biographical History, 1901-2001* (Canton, MA, US: Science History Publications, 2001), pp.133-137. Øivind Stenersen, "The Nobel Peace Prize: Some Aspects of the Decision-Making Process, 1932-39," *The Norwegian Nobel Institute Series*, Vol.1, No.4, 2000, pp.15-20. Øivind Stenersen, Ivar Libæk and Asle Sveen, *The Nobel Peace Prize: One Hundred Years for Peace, Laureates 1901-2000* (Oslo: J. W. Cappelens Forlag, 2001), pp.120-123.
 - 22) 「1937年6月24日付け国会決定」(ノーベル財団ホームページ<http://nobelprize.org/nobel_organizations/nobel_foundation/statutes-no.html?print=1>、2010年12月1日確認)。
 - 23) 「ノーベル平和賞の授与とノルウェー・ノーベル研究所の特別規則」第3条(同上ノーベル財団ホームページ)。
 - 24) ノーベル財団ホームページ<http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/nomination/index.html?print=1>、2010年12月1日確認)。
 - 25) ノーベル財団ホームページ<http://nobelprize.org/cgi-bin/print?from=%2Fnomination%2Fnomination_facts.html>、2010年12月1日確認)。
 - 26) 1978年のベギン(Menachem Begin)イスラエル首相の授賞式は、安全上の理由からオスロ大学講堂ではなく、オスロ市内のアーケシュフース城で行なわれた。同時受賞のサダト(Mohamed Anwar Al Sadat)エジプト大統領は授賞式を欠席した。
 - 27) ノーベル平和賞の女性受賞者については、以下が詳しい。アンゲリーカ・U・ロイッター、アンネ・リュッファー『ピース・ウーマン——ノーベル平和賞を受賞した12人の女性たち——』松野泰子、上浦倫人訳(英治出版、2009年)。
 - 28) "Nobel Prize Facts," ノーベル財団ホームページ<http://nobelprize.org/nobel_prizes/nobelprize_facts.html?print=1>、2010年12月1日確認)。

付記

本稿は2010年度高崎経済大学特別研究助成金による研究成果の一部である。高崎市および高崎経済大学に感謝申し上げます。

また、本稿は2010年12月4日の第49回慶應EU研究会で報告した「ノーベル賞の国際政治学——欧州統合とノーベル平和賞——」に基づき、その一部をまとめたものである。司会をして下さった慶應義塾大学大学院法務研究科の庄司克宏教授、多くの質問、コメントをして下さった出席者の皆様に心よりお礼申し上げます。

資料 アルフレッド・ノーベルの遺言（抜粋）

署名者アルフレッド・ベルンハルド・ノーベルは、以下が私の死の時点において私が遺す財産に関する私の最後の遺言書であることを熟慮の上ここに表明する。

（中略）

残りの換金可能な私の全財産は、以下の方法で処理されるものとする。私の遺言執行者によって安全な有価証券に投資された資本でもって基金を設立し、その利子は、その前年に人類に最大の利益をもたらした人たちに、賞の形で毎年分配されるものとする。この利子は五等分され、以下のように配分される。一部は物理学の分野で最も重要な発見または発明をした人物に、一部は最も重要な化学上の発見または改良をなした人物に、一部は生理学または医学の領域で最も重要な発見をした人物に、一部は文学で理想主義的な傾向の最もすぐれた作品を創作した人物に、そして一部は諸国民間の友好、常備軍の廃止または削減、平和会議の開催や推進のために最大もしくは最善の活動をした人物に。物理学賞と化学賞はスウェーデン科学アカデミーによって、生理学・医学賞はストックホルムのカロリンスカ研究所によって、文学賞はストックホルムのアカデミーによって、そして平和のチャンピオンへの賞はノルウェー国会が選出する5名の委員会によって授与される。賞の授与にあたっては、候補者の国籍はいっさい考慮されてはならず、スカンディナヴィア人であろうとなかろうと、最もふさわしい人物が受賞しなくてはならないというのが、私の明確な意志である。

私の遺言による処分の執行者として、私はヴェルムランド・ボフォシュ在住のラグナル・ソールマン(Ragnar Sohlman)氏とストックホルム・マルムシルナズガータン31番地およびウッデヴァラ近郊のベンクトフォシュ在住のルドルフ・リリエクヴィスト(Rudolf Lilljequist)氏を指名する。彼らの尽力と苦勞に報いるため、私は、恐らく本件に多大の時間を費やさなければならなくなるであろうラグナル・ソールマン氏に10万クローナを、ルドルフ・リリエクヴィスト氏には5万クローナを与える。

（中略）

本遺言書は、現在までの唯一有効なものであり、私の死後、万が一私の以前の遺言が存在したとしても、それらのすべてを無効にするものである。

さらに、私の死後、私の静脈が切開され、そして切開が終了し有能な医師が死の明らかな徴候を確認した時に、私の遺体はいわゆる火葬場にて火葬されるというのが、私の明確な希望かつ意志である。

パリにて 1895年11月27日

アルフレッド・ベルンハルド・ノーベル

アルフレッド・ベルンハルド・ノーベル氏は、正常な精神状態で、自由意思により上記がその

最後の遺言書であることを表明し、署名をしたものであり、我々は彼の面前で、かつ相互の面前で、これに証人として署名した。

シグルド・エーレンボリ (Sigurd Ehrenborg)

元中尉

パリ・ハウスマン通り84番地

R・W・ストレーレネルト (R. W. Strehlenert)

土木技師

カロリーヌ通り4番地

トス・ノルデンフェルト (Thos Nordenfelt)

建設業者

パリ・オベール通り8番地

レオナルド・ヴァス (Leonard Hwass)

土木技師

カロリーヌ通り4番地

出所：遺言全文のスウェーデン語原文および英語訳は、ノーベル財団ホームページ<http://www.nobelprize.org/alfred_nobel/will/testamente.html?print=1>を参照。邦訳は、矢野暢『ノーベル賞——二十世紀の普遍言語——』（中公新書、1988年）、217-222頁にある。本資料では矢野訳を原典に照らして修正した。